

# 日本語母語話者による名詞の敬語化

## — 男性・女性の比較から —

宮田 剛章

### 1. はじめに

敬語は学習者にとって最も習得困難な項目の1つであることは誰も認めるところであろう。それ故に研究の対象ともされてきたが、敬語というと、「おっしゃる」などの動詞が専ら注目されてきたように思われる。一方で動詞以外の品詞、例えば、名詞の敬語（以下、敬語名詞と称する）に関して日本語教育学の見地から研究されたものは少ない。形態的観点に限れば、一般に名詞を敬語化するには、和語なら接頭辞「お」を、漢語なら「ご」を語頭に付加するだけでよく、動詞の運用に必要な活用や接続まで考慮に入れる必要がない点では習得が容易である。そのような意味では、日本語学習者に対する敬語教育の一環として、名詞の敬語化をもっと推奨してもよいように思われる。しかしどの名詞に「お」または「ご」が付くのかについて、未だ明らかになっていない部分があり、日本語教師もその説明にしばしば窮することがある。それを解明する試みとして、これまでに柴田（1957）、田中（1972）、角田（1990）などの先行研究が挙げられるが、研究が古く、また調査対象・調査方法が日本語教育に合わせたものではない。また最近の日本語教育の見地から、西隈（2004）が敬語の接頭辞「お」と「ご」について報告しているが、記述も不十分で根拠がない。

本稿では、若年層の日本語母語話者<sup>1)</sup>を対象に、日本語能力試験の1級までの出題範囲に含まれる名詞について、どれに敬語の接頭辞「お」または「ご」が付くのか、宮田（2005）の手法を踏襲しつつ、名詞への付着度を男女別に算出する。またその付着度の要因が何かを対数線形モデル<sup>2)</sup>を用いて明らかにしていく。

### 2. 調査・分析方法

#### 2.1. 調査方法

調査協力者は20代から30代までの日本語母語話者45名（男性18名、女性27名）で、調査時期は2004年2月～5月である。国際交流基金（2002）から出版されている『日本語能力試験出題基準 改訂版』から、日本語能力試験1級の出題範囲に入る計6656項目の名詞（多義語もカウント、異なり語数は5574）を基に、アンケート調査票を作成した<sup>3)</sup>。名詞を丁寧に言うときに、もし名詞の前に「お」または「ご」（ま

たは、それ以外の敬語の接頭辞)を付けるとしたら、どちらが自然か(または、何も付けられない方が自然か)を判定するよう指示した。回答方式は、調査協力者の要望に合わせて、Excel ファイルに入力していくタイプ、もしくは紙に記入していくタイプの2つを用意したが、内容に違いはない。表1に実際に用いたアンケートの凡例を、表2にアンケート項目の一部を示す。

表1 調査票：凡例

<p>以下に示した名詞を丁寧に言うときに、もし名詞の前に「お」または「ご」を付けるとしたら、どちらが自然ですか。その判定をしてください。判定の仕方は以下の通りです。</p> <p>(1) 名詞の前に付けたとき、「お」だけが自然だと感じられるものがある場合、o (「お」のオー)を入力。  (2) 名詞の前に付けたとき、「ご」だけが自然だと感じられるものがある場合、g (「ご」のジー)を入力。  (3) 名詞の前に付けたとき、「お」と「ご」が両方自然だと感じられるものがある場合、og (「お・ご」のオージー)を入力。  (4) 名詞の前に付けたとき、「お」も「ご」も自然ではない(むしろ何もつけない方が自然だ)と感じられる場合、n (「なし」のエヌ)を入力。  (5) 名詞の前に付けたとき、「お」と「ご」以外の接頭辞(「おほ」、「み」、「おほみ」、「おみ」、「おほん」、「おん」、「ぎょ」)が自然だと感じられるものがある場合、その接頭辞をそのまま入力。  (6) 名詞の前に付けたとき、迷って判定した場合、m (「迷い」のエム)をo、g、nまたはその他の接頭辞の前に添える。  (7) いくら考えてどうしても判定が分からない場合、w (「わからない」のダブルユー)を入力。  (8) その他、何か気が付いた点があった場合、そのコメントを入力。</p> <p>以上、入力するのは基本的に記号で、o、g、n、m、w、必要なら直接の記述です。判定欄に入力してください。以下に入力例を挙げます。</p> <p>入力例1) 「『お』しか付かない! 『ご』はおかしい!」という判定の場合、入力はo (「お」)で。  入力例2) 「『お』はおかしい! 『ご』は付くかも?」という判定の場合、入力はmg (迷った「ご」)で。  入力例3) 「『お』を付けるのは自然だけど、『ご』は付くかも?」という判定の場合、入力はomg (「お」と迷った「ご」)で。  入力例4) 「『お』は付くかも?でも、『ご』は確実に付く!」という判定の場合、入力はmog (「迷った「お」と「ご」)で。  入力例5) 「『お』も『ご』も付くかも?」という判定の場合、入力はmorg (迷った「お」と迷った「ご」)で。  入力例6) 「何もつけない方が自然?」という判定の場合、入力はmn (迷った「なし」)で。  入力例7) 『お』や『ご』を前に付けると、リストに挙がっている単語に書かれていないが、後ろに『さん』や『さま』などの接尾辞が一緒に必要になってくる場合、o+さん (「お」と「さん」)やg+さま (「ご」と「さま」)などと書いて「さん」や「さま」を入力してください。</p> <p>意味・用例が挙げてあります。また同綴同音異義語(表記も読み方も同じだけど、意味が違う単語)に関してはセルに色づけしてあります。異綴同音異義語(読み方が同じだけど、表記と意味が違う単語)には色づけしてありません。<u>「お」または「ご」が名詞の前に付きそう</u>などとき、または、<u>判定に迷ったとき</u>、または、<u>同綴同音異義語および異綴同音異義語を回答するときは特に気をつけて判定</u>してください。語数が多いので、焦らず入力。質問等ありましたら、Eメール、または携帯電話で。</p> <p>(筆者の所属、連絡先)  (以下、調査項目)</p>
---

表2 調査票：調査項目の一部<sup>4)</sup>

番号	名詞(読み方)	意味・用例	判定
1	愛(あい)	「いつくしみ、いとおしみ」	
...	...	...	...
6656	ワンピース	「婦人・子供用の服で、身頃とスカートが一続きになったもの」	

本稿のアンケート調査は項目数が多く、信頼性の低下が予想された。それを軽減するために、一度に大量に答えるのではなく、空いた時間で少しずつ回答し、回答が無理な場合は回答を断念しても構わないことを強調した。また、調査協力者がアンケートを完答した場合、謝礼（2000円相当の図書券あるいは現金）を進呈した。

## 2.2. 分析方法

分析方法として、どのような言語的要因が『お』・『ご』の付着に影響するのか、または付着しにくくしているのかを探っていく。本稿で出現した回答様式はクロス集計した結果、34形式であった。紙面の都合上と日本語教育的観点から、本稿では回答様式は『『お』がつく』、『『ご』がつく』、『何もつかない』、の3つに絞り、クロス表および対数線形モデルを用いて分析を進める。

## 3. 結果と考察

### 3.1. 1要因毎に見た付着度および非付着度

この節では、「お」および「ご」の付着にどのような要因が影響をしているのかを探る。ここではクロス表を用いながら頻度および割合を算出し、男女別に傾向を分析していく。クロス表の一边を『『お』が付く』、『『ご』が付く』、『何も付かない』にする。前者2つが付着度を、後者が非付着度を表す。またもう一边に柴田（1957）と田中（1972）でも取り上げられた言語内的要因で、語種（和語・漢語・外来語・湯桶読み・和語+外来語・重箱読み・外来語+和語・外来語+漢語、漢語+和語+漢語）、拍数（1～9拍）、音韻的要因（「お」で始まる語、「ご」で始まる語）、形態的動作性の有無を用いる<sup>5)</sup>。表3～6にある黒いセルにより、分析する上で注目すべき箇所を示す。表3に男女における語種と「お」・「ご」の付着度および接頭辞の非付着度を示す。従来「お」が和語に、「ご」が漢語に付き、外来語には接頭辞が付きにくいとされており、表3でもそのような傾向が見られる。

表3 語種と「お」・「ご」の付着度、および接頭辞の非付着度

男 性									
語種	「お」			「ご」			何も付かない		
	付かず	付く	合計	付かず	付く	合計	付かず	それ以外	合計
和語	21956	8104	30060	28527	1533	30060	20302	9758	30060
	73.0	27.0	100.0	94.9	5.1	100.0	67.5	32.5	100.0
漢語	66719	8125	74844	55700	19144	74844	50308	24536	74844
	89.1	10.9	100.0	74.4	25.6	100.0	67.2	32.8	100.0
外来語	11219	1003	12222	11615	607	12222	10537	1685	12222
	91.8	8.2	100.0	95.0	5.0	100.0	86.2	13.8	100.0
湯桶	988	254	1242	1097	145	1242	875	367	1242
	79.5	20.5	100.0	88.3	11.7	100.0	70.5	29.5	100.0
和外	15	3	18	15	3	18	14	4	18
	83.3	16.7	100.0	83.3	16.7	100.0	77.8	22.2	100.0
重箱	957	321	1278	1103	175	1278	825	453	1278
	74.9	25.1	100.0	86.3	13.7	100.0	64.6	35.4	100.0
外和	31	5	36	32	4	36	29	7	36
	86.1	13.9	100.0	88.9	11.1	100.0	80.6	19.4	100.0
外漢	34	2	36	36	0	36	33	3	36
	94.4	5.6	100.0	100.0	0.0	100.0	91.7	8.3	100.0
漢和漢	17	19	36	32	4	36	15	21	36
	47.2	52.8	100.0	88.9	11.1	100.0	41.7	58.3	100.0
合計	101936	17836	119772	98157	21615	119772	82938	36834	119772
	85.1	14.9	100.0	82.0	18.0	100.0	69.2	30.8	100.0
女 性									
語種	「お」			「ご」			何も付かない		
	付かず	付く	合計	付かず	付く	合計	付かず	それ以外	合計
和語	36356	8734	45090	44703	387	45090	35144	9946	45090
	80.6	19.4	100.0	99.1	0.9	100.0	77.9	22.1	100.0
漢語	108202	4064	112266	94819	17447	112266	88629	23637	112266
	96.4	3.6	100.0	84.5	15.5	100.0	78.9	21.1	100.0
外来語	17996	337	18333	18151	182	18333	17697	636	18333
	98.2	1.8	100.0	99.0	1.0	100.0	96.5	3.5	100.0
湯桶	1626	237	1863	1792	71	1863	1537	326	1863
	87.3	12.7	100.0	96.2	3.8	100.0	82.5	17.5	100.0
和外	25	2	27	27	0	27	25	2	27
	92.6	7.4	100.0	100.0	0.0	100.0	92.6	7.4	100.0
重箱	1572	345	1917	1854	63	1917	1488	429	1917
	82.0	18.0	100.0	96.7	3.3	100.0	77.6	22.4	100.0
外和	54	0	54	54	0	54	54	0	54
	100.0	0.0	100.0	100.0	0.0	100.0	100.0	0.0	100.0
外漢	54	0	54	53	1	54	53	1	54
	100.0	0.0	100.0	98.1	1.9	100.0	98.1	1.9	100.0
漢和漢	26	28	54	53	1	54	25	29	54
	48.1	51.9	100.0	98.1	1.9	100.0	46.3	53.7	100.0
合計	165911	13747	179658	161506	18152	179658	114652	35006	179658
	92.3	7.7	100.0	89.9	10.1	100.0	80.5	19.5	100.0

従来「お」が和語に、「ご」が漢語に付き、外来語には接頭辞が付きにくいとされてきた。表3の男女を比較すると、「お」および「ご」が付く割合が、特に和語および重箱・湯桶読みの語（米、座敷、話し中、など）を中心に、男性において20%以上で高くなっていることが分かる。逆に何も付かない割合が、特に外来語および外来語を含む混種語（メール、ジェット機、など）を中心に、女性において90%以上で高い。

表4に男女における拍数と「お」・「ご」の付着度および接頭辞の非付着度を示す。表4で得られた特性が、男性と女性それぞれに反映された形になっている

表4 拍数と「お」・「ご」の付着度、および接頭辞の非付着度

男性									
拍数	「お」			「ご」			何も付かない		
	付かず	付く	合計	付かず	付く	合計	付かず	それ以外	合計
1拍	1792	152	1944	1929	15	1944	1648	296	1944
	92.2	7.8	100.0	99.2	0.8	100.0	84.8	15.2	100.0
2拍	15584	3838	19422	18114	1308	19422	14090	5332	19422
	80.2	19.8	100.0	93.3	6.7	100.0	72.5	27.5	100.0
3拍	34788	7404	42192	34581	7611	42192	28552	13640	42192
	82.5	17.5	100.0	82.0	18.0	100.0	67.7	32.3	100.0
4拍	44080	5726	49806	37480	12326	49806	33350	16456	49806
	88.5	11.5	100.0	75.3	24.7	100.0	67.0	33.0	100.0
5拍	3350	538	3888	3653	235	3888	3103	785	3888
	86.2	13.8	100.0	94.0	6.0	100.0	79.8	20.2	100.0
6拍	1349	127	1476	1397	79	1476	1262	214	1476
	91.4	8.6	100.0	94.6	5.4	100.0	85.5	14.5	100.0
7拍	329	13	342	321	21	342	301	41	342
	96.2	3.8	100.0	93.9	6.1	100.0	88.0	12.0	100.0
8拍	122	4	126	123	3	126	116	10	126
	96.8	3.2	100.0	97.6	2.4	100.0	92.1	7.9	100.0
9拍	51	3	54	54	0	54	49	5	54
	94.4	5.6	100.0	100.0	0.0	100.0	90.7	9.3	100.0
合計	101445	17805	119250	97652	21598	119250	82471	36779	119250
	85.1	14.9	100.0	81.9	18.1	100.0	69.2	30.8	100.0
女性									
拍数	「お」			「ご」			何も付かない		
	付かず	付く	合計	付かず	付く	合計	付かず	それ以外	合計
1拍	2787	129	2916	2913	3	2916	2739	177	2916
	95.6	4.4	100.0	99.9	0.1	100.0	93.9	6.1	100.0
2拍	25259	3874	29133	28429	704	29133	24007	5126	29133
	86.7	13.3	100.0	97.6	2.4	100.0	82.4	17.6	100.0
3拍	56962	6326	63288	57304	5984	63288	50174	13114	63288
	90.0	10.0	100.0	90.5	9.5	100.0	79.3	20.7	100.0
4拍	71768	2941	74709	63356	11353	74709	58797	15912	74709
	96.1	3.9	100.0	84.8	15.2	100.0	78.7	21.3	100.0
5拍	5436	396	5832	5755	77	5832	5294	538	5832
	93.2	6.8	100.0	98.7	1.3	100.0	90.8	9.2	100.0
6拍	2144	70	2214	2193	21	2214	2107	107	2214
	96.8	3.2	100.0	99.1	0.9	100.0	95.2	4.8	100.0
7拍	512	1	513	508	5	513	502	11	513
	99.8	0.2	100.0	99.0	1.0	100.0	97.9	2.1	100.0
8拍	189	0	189	188	1	189	186	3	189
	100.0	0.0	100.0	99.5	0.5	100.0	98.4	1.6	100.0
9拍	81	0	81	81	0	81	81	0	81
	100.0	0.0	100.0	100.0	0.0	100.0	100.0	0.0	100.0
合計	165138	13737	178875	160727	18148	178875	143887	34988	178875
	92.3	7.7	100.0	89.9	10.1	100.0	80.4	19.6	100.0

柴田 (1957:44) は、3拍以上と3拍以下に分け、「お」の付着度について分析を行い、3拍以上の語には「お」が付きにくいとし、拍数による語の分け方を変えても組織的な傾向が見られなかったとしている。本稿では出現した拍数により語を分けずに全て取り上げた結果、一定の傾向が見られた。表4の男女を比較すると、男性の場合は「お」が付く割合が10%を超える拍数が2～5拍であるのに対し、女性の場合は2～3拍となっている(寺、土産、小遣い、忘れ物、など)。また「ご」が付く割合が10%を超える拍数が男性の場合は3～4拍で、女性の場合は4拍のみとなっている(自身、回復、など)。逆に何も付かない割合が90%を超える拍数が男性の場合は8～9

拍で、女性の場合は1拍と6～9拍となっている（プラットホーム、インターナショナル、など）。柴田のいう「長い語には（「お」が）つきにくい」という傾向だけでなく、さらに一般化して「語が短すぎても長すぎても敬語の接頭辞がつきにくい」という傾向が確認された。

表5に男女における語頭の音韻的要因と「お」・「ご」の付着度および接頭辞の非付着度を示す。

表5 語頭の音韻的要因と「お」・「ご」の付着度、および接頭辞の非付着度

男 性							
音韻的要因	「お」			音韻的要因	「ご」		
	付かず	付く	合計		付かず	付く	合計
語頭が「お」	99675	17685	117360	語頭が「ご」	97554	21588	119142
以外の語	84.9	15.1	100.0	以外の語	81.9	18.1	100.0
語頭が「お」	2296	152	2448	語頭が「ご」	635	31	666
で始まる語	93.8	6.2	100.0	で始まる語	95.3	4.7	100.0
合計	101971	17837	119808	合計	98189	21619	119808
	85.1	14.9	100.0		82.0	18.0	100.0
女 性							
音韻的要因	「お」			音韻的要因	「ご」		
	付かず	付く	合計		付かず	付く	合計
語頭が「お」	162388	13652	176040	語頭が「ご」	160568	18145	178713
以外の語	92.2	7.8	100.0	以外の語	89.8	10.2	100.0
語頭が「お」	3576	96	3672	語頭が「ご」	991	8	999
で始まる語	97.4	2.6	100.0	で始まる語	99.2	0.8	100.0
合計	165964	13748	179712	合計	161559	18153	179712
	92.3	7.7	100.0		89.9	10.1	100.0

柴田（1957:44）は、「お」で始まる語には接頭辞の「お」が付きにくい（逆を言えば、「お」以外で始まる語は付きやすい）としている。本稿では、「ご」以外で始まる語には接頭辞の「ご」が付きやすいという仮説も立て、「お」の場合と同時に検証した。その結果、男女ともに「お」以外（および「ご」以外）で始まる語には、「お」（および「ご」）で始まる語よりも「お」（および「ご」）が付きやすいことが分かった（例外としては、教え、覚えなど）。

表6に男女の形態的動作性と「お」・「ご」の付着度、および接頭辞の非付着度を示す。田中（1972）は新聞の語彙調査から、動作性名詞に「お」または「ご」が付きやすいとしているが、本稿では形態的動作性という視点から、「お」および「ご」の付着度を算出した。その結果、男女ともに「お」も「ご」も形態的動作性のない名詞（人生、文章、など）よりも形態的動作性のある名詞（嫌い、生まれ、など）に付きやすく、さらに敬語の接頭辞は、形態的動作性のある名詞よりも形態的動作性のない名詞に付きにくいことが分かった。

表6 形態的動作性と「お」・「ご」の付着度、および接頭辞の非付着度

男性									
動作性の有無	「お」			「ご」			何も付かない		
	付かず	付く	合計	付かず	付く	合計	付かず	それ以外	合計
なし	71638	11504	83142	72359	10783	83142	61815	21327	83142
	86.2	13.8	100.0	87.0	13.0	100.0	74.3	25.7	100.0
あり	30333	6333	36666	25830	10836	36666	21153	15513	36666
	82.7	17.3	100.0	70.4	29.6	100.0	57.7	42.3	100.0
合計	101971	17837	119808	98189	21619	119808	82968	36840	119808
	85.1	14.9	100.0	82.0	18.0	100.0	69.3	30.7	100.0
女性									
動作性の有無	「お」			「ご」			何も付かない		
	付かず	付く	合計	付かず	付く	合計	付かず	それ以外	合計
なし	115904	8809	124713	117026	7687	124713	106389	18324	124713
	92.9	7.1	100.0	93.8	6.2	100.0	85.3	14.7	100.0
あり	50060	4939	54999	44533	10466	54999	38316	16683	54999
	91.0	9.0	100.0	81.0	19.0	100.0	69.7	30.3	100.0
合計	165964	13748	179712	161559	18153	179712	144705	35007	179712
	92.3	7.7	100.0	89.9	10.1	100.0	80.5	19.5	100.0

表3～6を通して、男性は女性よりも、「お」および「ご」の接頭辞を多く付け、女性は男性よりも、接頭辞を付けないほうが自然だとする回答が多い傾向にあることが分かった。一般に、女性は敬語を頻繁に使用するといわれているが、ここでは男性は「お」および「ご」を付ける許容範囲が広く、女性は「お」・「ご」を付ける範囲を限定している、という結果となった。この章では、アンケート形式により若年層日本語母語話者の内省による判断を集計しているため、実際の使用とは異なるかもしれない。また一般に女性は言語に対する規範意識が高いとされることを踏まえると、女性は「お」・「ご」を付けられる名詞を厳選し、その上で男性よりも頻繁に敬語を使用していると考えられる。

### 3.2. 複数の要因が付着度および非付着度に与える影響

3.1.では、1要因毎に「お」および「ご」の付着度を分析したが、そこでは注目している要因以外はセルの頻度を合算しているため、大まかな目安にはなるものの、厳密性に欠けるとい難点がある。またどの要因がどの程度「お」および「ご」の付着度に影響を与えているのかは、不明である。そこで、3.2.では複数の要因を同時に扱う対数線形モデルを用いてさらに分析を進める。

Agresti (2003) を参考に、対数線形モデルの一般式を本稿で取り上げた言語要因を用いて飽和モデルを立式すると、次のようになる。

$$\begin{aligned} \ln(m_{abcde}) = & \mu + \alpha_a + \beta_b + \gamma_c + \delta_d + \varepsilon_e + (\alpha\beta)_{ab} + (\alpha\gamma)_{ac} + (\alpha\delta)_{ad} + (\alpha\varepsilon)_{ae} + (\beta\gamma)_{bc} + (\beta\delta)_{bd} \\ & + (\beta\varepsilon)_{be} + (\gamma\delta)_{cd} + (\gamma\varepsilon)_{ce} + (\delta\varepsilon)_{de} + (\alpha\beta\gamma)_{abc} + (\alpha\beta\delta)_{abd} + (\alpha\beta\varepsilon)_{abe} + (\alpha\gamma\delta)_{acd} + (\alpha\gamma\varepsilon)_{ace} \\ & + (\alpha\delta\varepsilon)_{ade} + (\beta\gamma\delta)_{bcd} + (\beta\gamma\varepsilon)_{bce} + (\beta\delta\varepsilon)_{bde} + (\gamma\delta\varepsilon)_{cde} + (\alpha\beta\gamma\delta)_{abcd} + (\alpha\beta\gamma\varepsilon)_{abce} + (\alpha\beta\delta\varepsilon)_{abde} \\ & + (\alpha\gamma\delta\varepsilon)_{acde} + (\beta\gamma\delta\varepsilon)_{bcde} + (\alpha\beta\gamma\delta\varepsilon)_{abcde} \end{aligned}$$

- $\mu$  : 全平均効果
- $\alpha_a$  : 「お」(または「ご」)の付着・不付着 ( $a=1, 2$ )
  - $\alpha_1$  : 『お』(または『ご』)が付く」カテゴリーの主効果
  - $\alpha_2$  : 『お』(または『ご』)が付かない」カテゴリーの主効果
- $\beta_b$  : 語種 ( $b=1, 2, 3, 4$ )
  - $\beta_1$  : 和語のカテゴリーの主効果
  - $\beta_2$  : 漢語のカテゴリーの主効果
  - $\beta_3$  : 混種語(外来語で始まる混種語以外)のカテゴリーの主効果
  - $\beta_4$  : 外来語または外来語で始まる混種語のカテゴリーの主効果
- $\gamma_c$  : 拍数 ( $c=1, 2, 3, 4, 5$ )
  - $\gamma_1$  : 1拍のカテゴリーの主効果
  - $\gamma_2$  : 2拍のカテゴリーの主効果
  - $\gamma_3$  : 3拍のカテゴリーの主効果
  - $\gamma_4$  : 4拍のカテゴリーの主効果
  - $\gamma_5$  : 5拍以上のカテゴリーの主効果
- $\delta_d$  : 音韻的要因 ( $d=1, 2$ )
  - $\delta_1$  : 『お』(または『ご』)以外で始まる」カテゴリーの主効果
  - $\delta_2$  : 『お』(または『ご』)で始まる」カテゴリーの主効果
- $\varepsilon_e$  : 形態的動作性 ( $e=1, 2$ )
  - $\varepsilon_1$  : 「形態的動作性を持つ」カテゴリーの主効果
  - $\varepsilon_2$  : 「形態的動作性を持たない」カテゴリーの主効果
- $(\alpha\beta)_{ab}$  など括弧付きの項: ( $\alpha_a$  と  $\beta_b$  の) 交互作用
- $m_{abcde}$  : ( $a, b, c, d, e$ ) の位置にあるセルの度数  
 $\ln(m_{abcde})$  :  $m_{abcde}$  の自然対数 (=  $\log_e(m_{abcde})$ )

対数線形モデルの左辺にある全平均効果および主効果の項は、いわばそれぞれの要因が他の要因の影響を受けず単独で持つ効果で、交互作用の項は、各要因間で発生する影響を数量化したものである。交互作用を算出することで、どのような言語要因(または言語要因の組み合わせ)が、どの程度「お」および「ご」の付着に影響を与えているのかを把握することが可能になる。

まず、飽和モデルよりもより少ない項で対数線形モデルが構築することが可能かどうか、モデルの選択をしなければならない。まず減少法(ステップ数 10、有意水準 5%)により飽和モデルの変数選択を行った。その結果、「お」の付着に関するモデルで男性は  $(\alpha\beta\gamma\varepsilon)$   $(\beta\gamma\delta\varepsilon)$   $(\alpha\beta\delta)$   $(\alpha\delta\varepsilon)$ 、女性は  $(\alpha\beta\gamma\varepsilon)$   $(\alpha\gamma\delta\varepsilon)$   $(\beta\gamma\delta\varepsilon)$ 、「ご」に関するモデルで男性は  $(\alpha\beta\gamma\varepsilon)$   $(\beta\gamma\delta)$   $(\beta\delta\varepsilon)$   $(\gamma\delta\varepsilon)$   $(\alpha\delta)$ 、女性は  $(\alpha\beta\gamma\varepsilon)$   $(\beta\gamma\delta\varepsilon)$   $(\alpha\delta)$  となった。



括弧内の効果は、それだけでモデルの項が構築されているのではなく、そこから誘導される全ての項もモデルの構成要素となっていることを意味する。例えば、 $(\alpha\beta\gamma)$  なら、 $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 、 $\alpha\beta$ 、 $\beta\gamma$ 、 $\alpha\gamma$ 、 $\alpha\beta\gamma$  の項が誘導される。表7～8に男女それぞれにおける「お」および「ご」の付着に関する交互作用について、点推定と95%の区間推定を示す。区間推定の黒い背景（白抜き斜体文字）は項がプラスの効果を示し、また黒い背景（白抜き非斜体文字）はマイナスの効果を示す。プラスの効果とは、クロス表を構成するセル内の度数（つまり、モデル式でいう  $m_{abcde}$ ）を高める効果を示し、逆にマイナスの効果とは低くする効果を示す<sup>6)</sup>。因みに、白い背景の区間推定については、ゼロを跨いでいるため、プラスかマイナスかの方向性が分からない、つまりセルの度数を高くするのか低くするのか分からないものである。そのため、ここでは黒い背景のある項を中心に解釈を進めていく。

概観すると、プラスの効果だけでなく、マイナスの効果もいくつか見られ、それらが有機的に「お」および「ご」の付着に関与しているのが分かる。それゆえ、どれか1つの交互作用を取って論じるより、むしろその複合的な効果を総括していくことで表層化した現象を説明することが可能になる。

表7 「お」および「こ」の付着に関わる交互作用の点推定および区間推定（男性の場合）<sup>7)</sup>

対数線形モデルを 構成する項	「お」			「こ」		
	点推定	区間推定		点推定	区間推定	
		下限	上限		下限	上限
( $\alpha\beta$ ) <sub>11</sub>	3.03	1.04	5.02	0.54	0.11	0.97
( $\alpha\beta$ ) <sub>12</sub>	0.94	-1.13	3.02	0.59	0.59	1.18
( $\alpha\beta$ ) <sub>13</sub>	-9.51	-349.48	330.46	1.61	1.11	2.11
( $\alpha\gamma$ ) <sub>11</sub>	-0.02	-1771.55	1771.52	-2.60	-3206.35	3201.14
( $\alpha\gamma$ ) <sub>12</sub>	0.01	-0.34	0.37	-0.46	-1.06	0.14
( $\alpha\gamma$ ) <sub>13</sub>	0.45	0.25	0.65	0.55	0.31	0.85
( $\alpha\gamma$ ) <sub>14</sub>	0.25	0.04	0.46	0.57	0.29	0.85
( $\alpha\delta$ ) <sub>11</sub>	3.36	1.39	5.33	1.73	1.46	2.00
( $\alpha\epsilon$ ) <sub>11</sub>	1.03	0.38	1.69	0.83	0.24	1.42
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>111</sub>	-0.98	-1772.51	1770.55	-0.88	-3204.63	3202.86
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>112</sub>	0.25	-0.17	0.66	-0.06	-0.76	0.65
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>113</sub>	-0.13	-0.43	0.17	-0.37	-0.83	0.08
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>114</sub>	-0.46	-0.77	-0.14	-0.60	-1.07	-0.13
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>121</sub>	0.02	-1771.51	1771.55	1.11	-3202.63	3204.86
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>122</sub>	0.85	0.44	1.27	0.77	0.44	1.40
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>123</sub>	0.36	0.07	0.64	0.54	0.22	0.87
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>124</sub>	0.22	-0.07	0.52	0.71	0.38	1.04
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>131</sub>	0.00	0.00	0.00	-0.14	-10760.22	10759.94
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>132</sub>	-0.76	-1.46	-0.05	-0.09	-1.06	0.88
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>133</sub>	-0.48	-0.90	-0.05	-0.56	-1.11	-0.02
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>134</sub>	-0.62	-1.07	-0.16	-1.02	-1.60	-0.44
( $\alpha\beta\delta$ ) <sub>111</sub>	-1.66	-3.64	0.31			
( $\alpha\beta\delta$ ) <sub>121</sub>	-1.05	-3.12	1.01			
( $\alpha\beta\delta$ ) <sub>131</sub>	11.11	-328.85	351.08			
( $\alpha\beta\epsilon$ ) <sub>111</sub>	0.36	-0.25	0.97	-0.64	-1.38	0.10
( $\alpha\beta\epsilon$ ) <sub>121</sub>	-0.22	-2.32	1.88	-1.14	-3.25	0.97
( $\alpha\beta\epsilon$ ) <sub>131</sub>	-0.93	-1.87	4.47×10 <sup>-3</sup>	-0.75	-1.72	0.23
( $\alpha\gamma\epsilon$ ) <sub>111</sub>	0.26	-6531.15	6531.66	-0.07	-4689.53	4689.39
( $\alpha\gamma\epsilon$ ) <sub>121</sub>	-0.04	-1.00	0.92	0.01	-1.20	1.22
( $\alpha\gamma\epsilon$ ) <sub>131</sub>	-0.30	-0.92	0.32	-0.63	-1.31	0.04
( $\alpha\gamma\epsilon$ ) <sub>141</sub>	-0.13	-0.78	0.53	-0.53	-1.49	-0.16
( $\alpha\delta\epsilon$ ) <sub>111</sub>	-0.87	-1.22	-0.52			
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1111</sub>	-0.26	-6611.55	6611.02	0.00	0.00	0.00
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1121</sub>	-0.75	-1.75	0.26	-0.42	-1.78	0.94
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1131</sub>	0.46	-0.21	1.14	0.48	-0.34	1.31
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1141</sub>	0.55	-0.16	1.27	1.05	0.26	1.91
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1211</sub>	0.02	-6531.38	6531.43	0.00	0.00	0.00
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1221</sub>	0.72	-1.53	2.97	1.38	-0.98	3.74
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1231</sub>	0.44	-1.68	2.56	1.79	-0.34	3.93
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1241</sub>	0.28	-1.85	2.41	2.01	-0.12	4.14
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1311</sub>	0.00	0.00	0.00	7.28	-11734.09	11748.64
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1321</sub>	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1331</sub>	1.65	0.63	2.66	0.44	-0.67	1.54
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1341</sub>	0.62	-0.49	1.72	1.19	0.05	2.34

表8 「お」および「ご」の付着に関わる交互作用の点推定および区間推定（女性の場合）

対数線形モデルを構成する項	「お」			「ご」		
	点推定	区間推定		点推定	区間推定	
		下限	上限		下限	上限
( $\alpha\beta$ ) <sub>11</sub>	3.10	2.59	3.61	-0.48	-1.43	0.47
( $\alpha\beta$ ) <sub>12</sub>	0.02	-0.65	0.69	0.56	0.05	1.03
( $\alpha\beta$ ) <sub>13</sub>	3.54	3.30	4.38	1.55	0.82	2.28
( $\alpha\gamma$ ) <sub>11</sub>	-1.06	-2057.61	2055.48	-5.83	-13765.39	13753.73
( $\alpha\gamma$ ) <sub>12</sub>	-0.94	-2.39	0.50	-2.15	-4.15	-0.16
( $\alpha\gamma$ ) <sub>13</sub>	-0.54	-1.91	0.84	0.04	-0.40	0.48
( $\alpha\gamma$ ) <sub>14</sub>	-0.28	-1.34	0.79	0.24	-0.21	0.68
( $\alpha\delta$ ) <sub>11</sub>	1.29	0.66	1.92	2.89	2.19	3.59
( $\alpha\epsilon$ ) <sub>11</sub>	0.39	-1.18	1.97	0.40	-0.65	1.45
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>111</sub>	-2.93	-2059.46	2053.59	-11.51	-13623.50	13600.49
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>112</sub>	-0.65	-1.33	0.03	1.41	-1.79	3.61
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>113</sub>	-1.06	-1.59	-0.54	0.86	-0.14	1.86
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>114</sub>	-1.11	-1.67	-0.54	0.11	-0.91	1.14
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>121</sub>	0.01	-2056.51	2056.54	4.08	-13755.48	13763.64
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>122</sub>	1.50	0.69	2.31	3.16	-1.14	5.18
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>123</sub>	0.46	-0.22	1.15	1.96	1.42	2.50
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>124</sub>	0.46	-0.25	1.17	1.96	1.42	2.50
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>131</sub>	-0.21	-2758.01	2757.59	1.76	-60285.19	60288.71
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>132</sub>	-3.18	-4.21	-2.15	1.18	-1.20	3.56
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>133</sub>	-1.87	-2.45	-1.30	-0.11	-0.92	0.70
( $\alpha\beta\gamma$ ) <sub>134</sub>	-1.52	-2.14	-0.90	-0.74	-1.60	0.13
( $\alpha\beta\epsilon$ ) <sub>111</sub>	0.24	-1.01	1.49	0.22	-1.25	1.68
( $\alpha\beta\epsilon$ ) <sub>121</sub>	-5.17	-34.85	24.52	-4.43	-18.06	9.20
( $\alpha\beta\epsilon$ ) <sub>131</sub>	-2.51	-4.12	-0.91	-1.93	-4.25	0.39
( $\alpha\gamma\delta$ ) <sub>111</sub>	3.00	-5.83	11.83			
( $\alpha\gamma\delta$ ) <sub>121</sub>	2.14	0.55	3.44			
( $\alpha\gamma\delta$ ) <sub>131</sub>	2.21	0.91	3.51			
( $\alpha\gamma\delta$ ) <sub>141</sub>	1.15	0.21	2.09			
( $\alpha\gamma\epsilon$ ) <sub>111</sub>	4.17	-24708.97	24717.31	14.05	-13734.13	13762.22
( $\alpha\gamma\epsilon$ ) <sub>121</sub>	-0.85	-16.26	14.56	2.07	-0.56	4.69
( $\alpha\gamma\epsilon$ ) <sub>131</sub>	1.80	-0.20	3.81	0.40	-0.76	1.56
( $\alpha\gamma\epsilon$ ) <sub>141</sub>	-0.72	-2.88	1.44	-0.96	-2.35	0.44
( $\alpha\delta\epsilon$ ) <sub>111</sub>	0.14	-0.86	1.14			
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1111</sub>	-1.47	-3794.03	3791.08	0.00	0.00	0.00
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1121</sub>	-4.39	-3.75	-3.03	-3.24	-6.39	-0.08
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1131</sub>	0.98	-0.34	2.31	-0.92	-2.49	0.66
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1141</sub>	2.26	0.55	3.97	1.01	-0.76	2.78
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1211</sub>	0.00	0.00	0.00	0.24	-14421.39	14421.87
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1221</sub>	2.00	-27.69	31.69	3.32	-10.52	17.17
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1231</sub>	5.37	-24.32	35.06	4.57	-9.08	18.21
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1241</sub>	6.00	-23.72	35.71	6.00	-7.66	19.66
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1311</sub>	0.00	0.00	0.00	-1.76	-60309.45	60305.93
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1321</sub>	1.00	-767.42	769.42	0.00	0.00	0.00
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1331</sub>	3.35	1.70	5.06	1.41	-1.02	3.83
( $\alpha\beta\gamma\epsilon$ ) <sub>1341</sub>	2.71	0.63	4.78	3.17	0.55	5.76
( $\alpha\gamma\delta\epsilon$ ) <sub>1111</sub>	-2.70	-24557.86	24552.47			
( $\alpha\gamma\delta\epsilon$ ) <sub>1211</sub>	3.97	-11.38	19.32			
( $\alpha\gamma\delta\epsilon$ ) <sub>1311</sub>	-2.68	-4.32	-1.14			
( $\alpha\gamma\delta\epsilon$ ) <sub>1411</sub>	-1.03	-2.40	0.33			

そこで表7～8を基に、方向性のあった結果に着目し、「お」の付着に関する交互作用について推定値を計算してみると、表9～10のようにまとめられる。

表9 「お」の付着への影響（男性と女性の場合）

男 性						女 性					
「お」2拍、「お」以外に始まる語、形態的動件性」の「お」の付着への影響						「お」2拍、「お」以外に始まる語、形態的動件性」の「お」の付着への影響					
$\alpha$	$\beta$	$\gamma$	$\delta$	$\epsilon$	△推定	$\alpha$	$\beta$	$\gamma$	$\delta$	$\epsilon$	△推定
1			1	1	-0.87	1	1	2		1	-4.39
1				1	1.03	1		2	1		2.14
1			1		3.36	1			1		1.29
1	1				3.03	1	1				3.10
合計						合計					
6.55						2.14					
「お」3拍、「お」以外に始まる語、形態的動件性」の「お」の付着への影響						「お」3拍、「お」以外に始まる語、形態的動件性」の「お」の付着への影響					
1			1	1	-0.87	1		3	1	1	-2.68
1				1	1.03	1		3	1		2.21
1			1		3.36	1	1	3			-1.06
1		3			0.45	1			1		1.29
1	1				3.03	1	1				3.10
合計						合計					
7.00						2.86					
「お」4拍、「お」以外に始まる語、形態的動件性」の「お」の付着への影響						「お」4拍、「お」以外に始まる語、形態的動件性」の「お」の付着への影響					
1			1	1	-0.87	1	1	4		1	2.26
1	1				-0.46	1		4	1		1.15
1				1	1.03	1	1	4			-1.11
1			1		3.36	1			1		1.29
1		4			0.25	1	1				3.10
1	1				3.03						
合計						合計					
6.34						6.69					
「お」2拍、「お」以外に始まる語、形態的動件性」の「お」の付着への影響						「お」2拍、「お」以外に始まる語、形態的動件性」の「お」の付着への影響					
1			1	1	-0.87	1		2	1		2.14
1	2		2		0.85	1	2	2			1.50
1				1	1.03	1			1		1.29
1			1		3.36						
合計						合計					
4.37						4.93					
「お」3拍、「お」以外に始まる語、形態的動件性」の「お」の付着への影響						「お」3拍、「お」以外に始まる語、形態的動件性」の「お」の付着への影響					
1			1	1	-0.87	1		3	1	1	-2.68
1	2		3		0.38	1		3	1		2.21
1				1	1.03	1			1		1.29
1			1		3.36						
1		3			0.45						
合計						合計					
4.33						0.82					
「お」4拍、「お」以外に始まる語、形態的動件性」の「お」の付着への影響						「お」4拍、「お」以外に始まる語、形態的動件性」の「お」の付着への影響					
1			1	1	-0.87	1		4	1		1.15
1				1	1.03	1			1		1.29
1			1		3.36						
1		4			0.25						
合計						合計					
3.77						2.44					
「お」2拍、「お」以外に始まる語、形態的動件性」の「お」の付着への影響						「お」2拍、「お」以外に始まる語、形態的動件性」の「お」の付着への影響					
1			1	1	-0.87	1		2	1		2.14
1	3		2		-0.78	1	3	2		1	-2.51
1				1	1.03	1	3	2			-3.18
1			1		3.36	1			1		1.29
合計						合計					
2.76						3.84					
「お」3拍、「お」以外に始まる語、形態的動件性」の「お」の付着への影響						「お」3拍、「お」以外に始まる語、形態的動件性」の「お」の付着への影響					
1	3		3	1	1.65	1	3	3	1	1	-2.68
1			1	1	-0.87	1	3	3		1	3.38
1	3		3		-0.48	1		3	1		2.21
1				1	1.03	1	3			1	-2.51
1			1		3.36	1	3	3			-1.87
1		3			0.45	1			1		1.29
合計						合計					
5.14						3.84					
「お」4拍、「お」以外に始まる語、形態的動件性」の「お」の付着への影響						「お」4拍、「お」以外に始まる語、形態的動件性」の「お」の付着への影響					
1			1	1	-0.87	1	3	4		1	2.71
1	3		4		-0.62	1		4	1		1.15
1				1	1.03	1	3			1	-2.51
1			1		3.36	1	3	4			-1.62
1		4			0.25	1			1		1.29
合計						合計					
3.15						4.96					

表9を見ると、男女ともに「お」を付きにくくする交互作用の組み合わせは特に確認されなかった。概ね「お」以外で始まり、かつ形態的動作性を持つほうが、そうでない場合よりも効果が高いことが分かる。その条件下で語種を比較すると、男性については、2～4拍とも和語（例「芝居」）に「お」が付きやすいのが分かる。女性については、2拍は漢語（例「菓子」）に、3拍は混種語（例「気持ち」）に、4拍は和語（例「考え」）に「お」が付きやすいのが分かる。また拍数で比較すると、男性については、和語は3拍（例「住まい」）に、漢語は2～3拍（例「宅」）に、混種語は3拍（例「座敷」）に「お」が付きやすい。女性については、和語は4拍（例「受け取り」）に、漢語は2拍（例「腕」）に、混種語は4拍（例「坊さん」）に「お」が付きやすい。全体でみると、和語の効果が6～7ポイント、漢語の効果が約4ポイント、混種語の効果が約2～5ポイントであることから、従来通り和語に「お」が付きやすい傾向であるといえる。性別で見ると、「お」以外で始まり形態的動作性のもと、男性は3拍の和語（例「助け」）に、女性は4拍の和語（例「人柄」）に最も「お」が付きやすいといえる。

次に「ご」の付着に関する交互作用について、表10に推定値を示す。表10を見ると、男女ともに「ご」を付きにくくする交互作用の組み合わせは女性の2拍の和語以外は特に確認されなかった。概ね「ご」以外で始まり、かつ形態的動作性を持つほうが、そうでない場合よりも効果が高いことが分かる。その条件下で語種を比較すると、男性については、2～4拍とも漢語（例「案内」）と混種語（例「身分」）に「ご」が付きやすいのが分かる。女性については、2～3拍は漢語（例「考慮」）に、4拍は混種語（例「両替」）に「ご」が付きやすいのが分かる。また拍数で比較すると、男性については、和語と漢語と混種語ともに3拍（例「入社」）に「ご」が付きやすい。女性については、和語と漢語は3～4拍（例「説得」）に、混種語は4拍（例「職場」）に「ご」が付きやすい。全体でみると、「ご」以外で始まり形態的動作性のもと、和語の効果が大体3ポイント、漢語の効果が約4～5ポイント、混種語の効果が大体4ポイントであることから、従来傾向通り漢語に「ご」が付きやすいといえる。性別で見ると、男性は3拍の漢語（例「披露」）に、女性は4拍の混種語（例「両替」）に最も「ご」が付きやすいといえる。以上より、男女間には細かい差異はあるものの、全体での結果をおおよそ反映している。

表 10 「ご」の付着への影響（男性と女性の場合）

男 性						女 性					
「和語、2拍、「ご」以外に始まる語、形造的動件性」の「ご」の付着への影響						「和語、2拍、「ご」以外に始まる語、形造的動件性」の「ご」の付着への影響					
α	β	γ	δ	ε	ε推定	α	β	γ	δ	ε	ε推定
1				1	0.83	1	1	2		1	-3.24
1			1		1.73	1			1		2.89
1	1				0.54	1		2			-2.15
合計						合計					
3.10						-2.50					
「和語、3拍、「ご」以外に始まる語、形造的動件性」の「ご」の付着への影響						「和語、3拍、「ご」以外に始まる語、形造的動件性」の「ご」の付着への影響					
1				1	0.83	1			1		2.89
1			1		1.73						
1		3			0.58						
1	1				0.54						
合計						合計					
3.68						2.89					
「和語、4拍、「ご」以外に始まる語、形造的動件性」の「ご」の付着への影響						「和語、4拍、「ご」以外に始まる語、形造的動件性」の「ご」の付着への影響					
1	1	4		1	1.08	1			1		2.89
1		4		1	-0.83						
1	1	4			-0.60						
1				1	0.83						
1			1		1.73						
1		4			0.57						
1	1				0.54						
合計						合計					
3.92						2.89					
「和語、2拍、「ご」以外に始まる語、形造的動件性」の「ご」の付着への影響						「和語、2拍、「ご」以外に始まる語、形造的動件性」の「ご」の付着への影響					
1	2	2			0.77	1	2	2			3.16
1				1	0.83	1			1		2.89
1			1		1.73	1		2			-2.15
1	2				0.89	1	2				0.56
合計						合計					
4.22						4.46					
「和語、3拍、「ご」以外に始まる語、形造的動件性」の「ご」の付着への影響						「和語、3拍、「ご」以外に始まる語、形造的動件性」の「ご」の付着への影響					
1	2	3			0.54	1	2	3			1.96
1				1	0.83	1			1		2.89
1			1		1.73	1	2				0.56
1		3			0.58						
1	2				0.89						
合計						合計					
4.57						5.41					
「和語、4拍、「ご」以外に始まる語、形造的動件性」の「ご」の付着への影響						「和語、4拍、「ご」以外に始まる語、形造的動件性」の「ご」の付着への影響					
1		4		1	-0.83	1	2	4			1.96
1	2	4			0.71	1			1		2.89
1				1	0.83	1	2				0.56
1			1		1.73						
1		4			0.57						
1	2				0.89						
合計						合計					
3.90						5.41					
「和語、2拍、「ご」以外に始まる語、形造的動件性」の「ご」の付着への影響						「和語、2拍、「ご」以外に始まる語、形造的動件性」の「ご」の付着への影響					
1				1	0.83	1			1		2.89
1			1		1.73	1		2			-2.15
1	3				1.61	1	3				1.55
合計						合計					
4.17						2.29					
「和語、3拍、「ご」以外に始まる語、形造的動件性」の「ご」の付着への影響						「和語、3拍、「ご」以外に始まる語、形造的動件性」の「ご」の付着への影響					
1	3	3			-0.56	1			1		2.89
1				1	0.83	1	3				1.55
1			1		1.73						
1		3			0.58						
1	3				1.61						
合計						合計					
4.19						4.44					
「和語、4拍、「ご」以外に始まる語、形造的動件性」の「ご」の付着への影響						「和語、4拍、「ご」以外に始まる語、形造的動件性」の「ご」の付着への影響					
1	3	4		1	1.19	1	3	4		1	3.17
1		4		1	-0.83	1			1		2.89
1	3	4			-1.02	1	3				1.55
1				1	0.83						
1			1		1.73						
1		4			0.57						
1	3				1.61						
合計						合計					
4.08						7.61					

#### 4. おわりに

本稿では、敬語の接頭辞「お」・「ご」がどのような名詞に付き、またその要因は何かを探ってきた。今までの報告と異なり、日本語能力試験の出題範囲になっている語彙および調査協力者数が多いことと、現代の若年層を対象にしていることで、日本語

教育学的に有益な情報を提供し、また言語学的にも複数のカテゴリーを同時に分析していくことができた。しかし本稿では接頭辞「お」「ご」の名詞へ付着度を分析しただけで、その付着した名詞の敬語機能については触れられていないが、実証研究を進めていくことで傾向が見出されるのではないだろうか。また、計算機の都合上、「お」「ご」の付着要因を言語内的要因に限り、言語外的要因（性別、年齢、学歴、職業など）との関わりについて本稿では言及していない。今後の課題として、敬語の接頭辞が付着した名詞がどのような機能を持っているのか、また言語外的要因あるいは意味分野の要因が「お」「ご」の付着にどう影響するかについて調査を進めていきたい。

## 付記

お忙しい中、忍耐強く調査にご協力くださった方々に心から御礼を申し上げる。また本稿を執筆するにあたり、数々の助言をくださった日本大学文理学部の荻野綱男氏と南山大学数理情報学部の松田眞一氏とに御礼申し上げます。

## 註

- 1) 日本語を学習する留学生の世代が若い世代に多いことから、それと対照となる20～30代の日本語母語話者を対象に調査を行った。調査協力者の抽出は有意抽出法による。回収率は93.45%である。学生時代の専攻、および居住地を以下に示す。

学生時代の専攻			人数	割合 (%)
大卒以上	人文科学	日本語教育学	6	13.3
		日本語学	9	20.0
		日本文学	13	28.9
		外国語学・外国文学	4	8.9
	自然科学	文化	2	4.4
		自然地理学	1	2.2
		農学	2	4.4
		生物学	1	2.2
		化学	2	4.4
		栄養学	1	2.2
		社会学	1	2.2
高卒	法学	1	2.2	
合計			3	6.7
合計			45	100
調査時における調査協力者の居住地			人数	割合 (%)
関東地方	東京		23	51.1
	神奈川		6	13.3
中部・東海地方	愛知		3	6.7
	岐阜		1	2.2
	三重		2	4.4
	静岡		2	4.4
東北地方	宮城		1	2.2
北陸地方	福井		1	2.2
海外			6	13.3
合計			45	100

また敬語に大きく関わる要因として性差があるが、男女それぞれ分析した結果、大きな差が見られなかったことから合算して分析を行った。

2) 対数線形モデルとは、クロス表を構成する各セルの度数の対数値がいくつかの要因効果（全平均効果、主効果、および主効果の組み合わせによって起こる交互作用）に分解されると仮定したモデルである。カイ二乗検定だけでは対応が困難である多次元のクロス表に、どのセルがどのような要因で歪んでいるのかを知るために有効な分析法とされている。

3) 日本語学習者の日本語運用能力を測るための代表的な試験が、日本語能力試験である。本研究で日本語能力試験の語彙を選んだのは、日本語学の日本語教育学への応用を視野に入れた研究であるためである。その語彙の1級レベルとなれば「社会生活をする上で必要な総合的な日本語能力」の範疇になり、日本語母語話者が使う語彙をほぼ最大公約数的に網羅していることを意味する。そのため、どのレベルの日本語学習者も敬語名詞の結果を参考にすることが可能となる。

調査項目作成時に留意した問題点として、日本語能力試験1級出題基準の語彙からどの語を選択するかということと、選択された語の意味・用例をどのように記述するのかという点がある。まず以下の手順で日本語能力試験1級語彙を篩にかけた：

(1) 『日本国語大辞典 第二版』の定める品詞分類に従った結果、名詞以外の品詞しかない語を除外（形容動詞と名詞の区別に関する論議があるが、とにかく名詞と定められているものは全て項目として含めた）、(2) 日本語能力試験出題基準にある語彙リストの中に、既に「お」および「ご」が付いている語を除外（例：おかあさん、お陰、ご飯、ご無沙汰など）、(3) 名詞でも、方言、古語、専門語でしか使われないと思われる一般的でない語を除外（例：君（「天皇」の意）、にわか（「にわか狂言」の意）など）、(4) 現代共通語の名詞でも、単独では存在できず、専ら複合語でしか存在できない語を除外（例：魚（うお）、住（じゅう）など）。このような過程を経て5574語を採用した。

意味・用例の作成は『日本国語大辞典 第2版』、『広辞苑 第5版』、『大辞林 第2版』、『大辞泉 第1版』、『日本語大辞典』を参考にした。しかし、それでもなお多義語の意味項目の採用について、辞書によって記述がばらつくものや一般的であるかどうかの判断が微妙であるものがあつた。そこでまず日本文学、日本語学、日本語教育を専攻する者ら数名に確認し、汎用性が高いと思われる現代共通語の意味を採用した。判定者が日本語に比較的精通している者であるため、さらに専門外の日本語母語話者数名を対象にした予備調査により意味・用例になじみのないと判



断されたものに関しては削除した。このような過程を経て、計 6656 項目が調査の対象となった。

4) 項目は、ほぼあいうえお順に提示した。

5) 「語種」については、久松潜一(監)(1982)の凡例に従って和語と漢語・外来語とに分けた。金田一ほか(編集責任)(1988:422)にある漢語の定義の1つとして、外国語の音訳を除いた全ての字音語(特に漢音と呉音と唐宋音で読む語)を便宜上漢語とする。外来語は中国起源の語以外の借用語で、基本的に洋語だが、梵語等も含めた。例えば、「返事」は字音語であり、和製なので漢語にし、「歌留多」と「禅」は字音語であるが、元々それぞれがポルトガル語と梵語なので、外来語とした。

形態的動作性とは、形態的に動詞から派生した名詞であることで、和語動詞の連用形とサ変動詞の語幹を指す。田中(1972)が、「お」および「ご」が付着する語に、動作性名詞(和語動詞の転生名詞、あるいはサ変語幹として用いられる漢語名詞)が最も多く現れると報告している。しかし本稿では動作性を田中よりも広い定義として捉える。和語動詞の連用形でも複合語の後部構成要素になっている語(「雨降り」、「後回し」など)やサ変動詞語幹でも漢語に限らず他の語種も「する」が後続するもの(「アップ」、「アプローチ」など)も、形態的動作性として含めた。「する」が名詞に後続するかどうかについては、松村 明(監)(1995)および松村 明ほか(編)(1995)を参考にした。

6) 正確に言えば、効果がプラスに働くと、左辺の  $\log_e(m_{abcde})$  が大きくなり、マイナスに働くと小さくなる。対数の底は、 $e (=2.718\dots)$  なので、 $m_{abcde}$  に対して単調増加関数である。つまり、「効果がプラス(またはマイナス)  $\rightarrow \log_e(m_{abcde})$  が増加(または減少)  $\rightarrow m_{abcde}$  が増加(または減少)」が成り立つ。

7)  $(\alpha\beta)_{14}$  や  $(\alpha\beta\gamma)_{115}$  など、各主効果の末尾のカテゴリーが含まれる交互作用については、計算の便宜上ゼロにパラメータ設定されているため、表8では割愛している。ゼロに設定された項については、表9の結果を解釈する上での基準となる。

## 参考文献

- 梅棹忠夫、金田一春彦、阪倉篤義、日野原重明(監)(1989)『日本語大辞典』講談社  
金田一春彦、林 大、柴田 武(編集責任)(1988)『日本語百科大事典』大修館書店  
国際交流基金(2002)『日本語能力試験出題基準 改訂版』凡人社  
柴田 武(1957)「『お』の付く語・付かない語」『言語生活』70、40-49  
新村 出(編)(1998)『広辞苑 第五版』岩波書店

- 田中章夫 (1972) 「『オ』のつくことば・『ゴ』のつくことば」『国文学 解釈と鑑賞』  
37 (6) (5月臨時増刊号)、40-45
- 角田太作 (1990) 「所有者敬語と所有傾斜」『文法と意味の間 - 国広哲弥教授還暦退  
官記念論文集 -』15-27、くろしお出版
- 西隈俊哉 (2004) 「『お』と『ご』の使い分け」『月刊日本語』11、32-33
- 日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部 (編) (2002) 『日本国語大  
辞典 第二版』小学館
- 久松潜一 (監) (1982) 『新装改訂 新潮国語辞典 - 現代語・古語 -』新潮社
- 松村 明、三省堂編修所 (編) (1995) 『大辞林 第二版』三省堂
- 松村 明 (監) (1995) 『大辞泉 第一版』小学館
- 宮田剛章 (2005) 「『お』か『ご』か? 日本語母語話者による名詞の敬語化 - 日本  
語能力試験の語彙から - 」『計量国語学』第 25 卷 3 号、103-122、計量国  
語学会
- Agresti, A (2003) 『カテゴリーカルデータ解析入門 (An Introduction to Categorical  
Data Analysis)』(訳者: 渡邊裕之、菅波秀規、吉田光宏、角野修司、寒水孝  
司、松永信人) サイエンティスト社

(みやた たけあき・東京都立大学大学院博士課程修了生)